

大崎は、日本初の「飛行船」が生まれ、飛んだまち。

私達のまち「大崎」の歴史の中に埋もれた興味深い事柄や、ゆかりのストーリーを訪ねる「大崎今昔物語」。

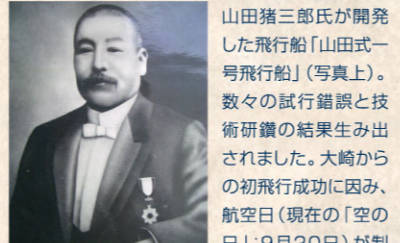
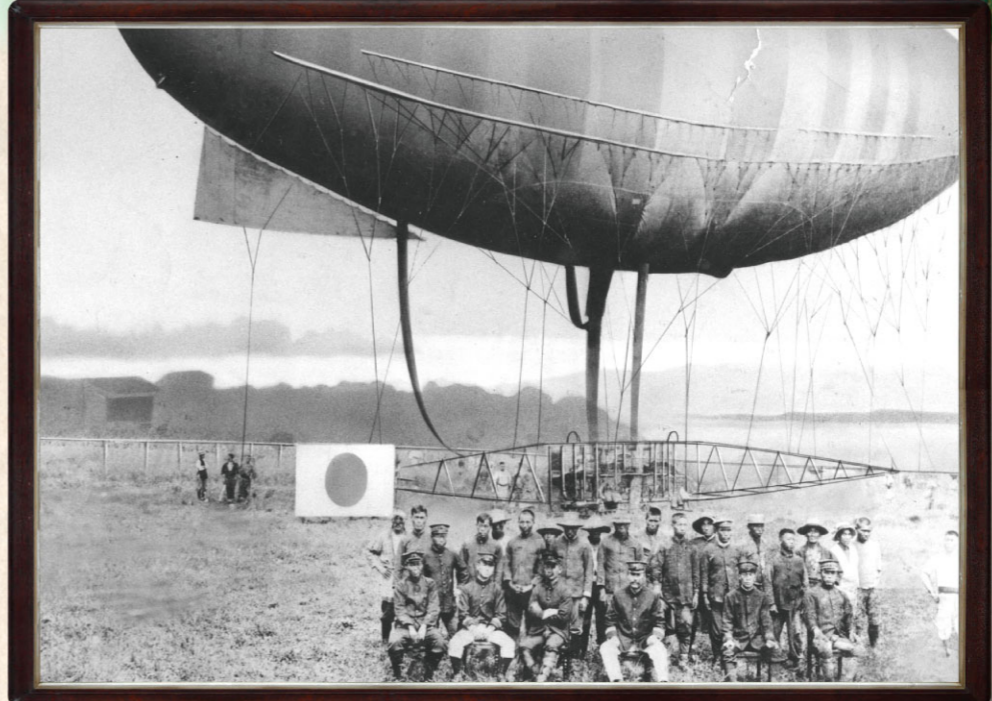
過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNAの一端が、少しでも明らかになればと願い、

一話完結のシリーズとして取り上げていきます。その第一話は、

大崎から日本初の「飛行船」が飛んだ話。“ものづくりのまち”大崎のルーツはここにもありました。



“ものづくりのまち大崎”の先駆けともなった日本初の飛行船製造。第1号機は明治43年初めて大崎から“未来”へと飛翔。のちに気象観測用気球へ発展、世界の空から地球を見守り続けます。



日本の飛行船の父、(株)気球製作所創業者・山田猪三郎氏

山田猪三郎氏が開発した飛行船「山田式一号飛行船」(写真上)。数々の試行錯誤と技術研鑽の結果生み出されました。大崎からの初飛行成功に因み、航空日(現在の「空の日」:9月20日)が制定されたと言われていいます。



大崎からのテスト飛行に成功した「山田式一号飛行船」や、東京上空を初めて一周した「山田式三号飛行船」の格納庫がある大崎の(株)気球製作所(左上写真)。当時はすでに、係留気球がアドバルーンとしての役割を担っていたことが伺えます。また右ページ写真は東京上空を一周した三号機。双発150馬力エンジンを積み、大崎から日比谷、愛宕山へと周り大崎に帰還。約20kmの飛行に成功し、本格的な飛行船実用化の時代を開きました。



(株)気球製作所は、明治40年、工場拡張のため港区高輪から大崎駅東口へ移転。この地で飛行船をはじめ広告用係留気球などの多くの気球の開発製造に注力。その後昭和9年、山手通りの拡幅計画に伴い現在地の北糀谷に移転、操業を続けています。



大田区北糀谷にある(株)気球製作所では、気象観測用気球の高度3万m超での強度維持に向けて、1日1個、破裂するまで膨らませる試験を敢行。世界の気象予報システム用気球としての技術研鑽に努めています。

象観測用機器を上げるための気球の製造を通じ、世界各地の天気予報やオゾン観測等をサポート、「地球環境の監視役」としてこの一助を担うことができました。現在、(株)気球製作所を経営するのは山田猪三郎氏の曾孫にあたる豊岡清さん(写真)。歴史に名を残すものづくり企業を引き継ぐ豊岡さん、「社会に役立つ気球づくりを通じ、飛行船づくりで世の役に立つことを願った曾祖父の意に少しでも応えたい」と語っています。



ソノソノデと呼ばれる気象観測用機器を上げるための気球の製造を通じ、世界各地の天気予報やオゾン観測等をサポート、「地球環境の監視役」としてこの一助を担うことができました。現在、(株)気球製作所を経営するのは山田猪三郎氏の曾孫にあたる豊岡清さん(写真)。歴史に名を残すものづくり企業を引き継ぐ豊岡さん、「社会に役立つ気球づくりを通じ、飛行船づくりで世の役に立つことを願った曾祖父の意に少しでも応えたい」と語っています。



社長の豊岡 清さん